困っている子供をチームで支える楽しさ

― 一人で抱えず、みんなで「一歩」をつくる ―

難しい児童・生徒指導ほど、一人で抱えると苦しくなります。けれど、担任、養護教諭、学年、特別支援コーディネーター、SC・SSWなどがつながると、見えてくることが増えます。教頭は、その人たちを結び、情報を整理し、役割を調整しながら、子供の小さな変化をチームの喜びに変えられる立場です。「自分が全部解決する」のではなく、「みんなの力が生きる形をつくる」と考えると、難しい対応にも手応えが生まれます。

工夫1 「誰が悪い？」より「何が必要？」から始める

- 今必要な支援を考える。
- 背景にある複数の要因を見る。
- 本人の言葉も一度は確かめる。

工夫2 情報を一枚の絵にする

- 担任・養護教諭・保護者から聞く。
- 事実と推測を分けて並べる。
- 次の確認事項と時期を決める。

工夫3 役割を小さく分ける

- 誰が・いつ・何をするかを決める。
- 不在でも続く分担にする。
- 保護者への連絡窓口をそろえる。

工夫4 できた場面をケース会議で共有する

- 落ち着けた時間や笑顔も話す。
- できた条件をみんなで考える。
- 合わない支援は早く修正する。

工夫5 子供の一歩をみんなで喜ぶ

- 小さな変化を具体的に伝える。
- 担任だけでなく関係職員にも返す。
- 本人・家庭とも成長を喜ぶ。

明日、ちょっとやってみよう

1 今必要な支援を考える。
2 担任・養護教諭・保護者から聞く。
3 誰が・いつ・何をするかを決める。
4 落ち着けた時間や笑顔も話す。
5 小さな変化を具体的に伝える。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『生徒指導提要』（令和4年12月改訂）第1章「生徒指導の基礎」・第3章「チーム学校による生徒指導体制」。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

困っている子供をチームで支える楽しさ

― 一人で抱えず、みんなで「一歩」をつくる ―

工夫1〜3：関わりの意図と具体的な進め方

工夫1 「誰が悪い？」より「何が必要？」から始める

課題が起きたら原因探しだけでなく、今の子供に必要な支援を考えます。背景には学習、友人関係、家庭、発達など複数の要因が重なることもあります。職員の見方が責任追及から支援づくりへ変わります。「できていないこと」だけでなく「できている場面」にも目を向けます。本人の言葉を必ず一度は確認し、支援する側だけで結論を決めません。
最初に、安全と安心が確保されているかを確認します。その上で、子供の困り感を本人の言葉や様子から捉えます。「支援を考える」ことと、いじめや人権侵害などの事実確認・組織的対応は両立させます。原因や責任を曖昧にするための言葉にしないことが大切です。

工夫2 情報を一枚の絵にする

担任、養護教諭、保護者などが持つ情報を短く持ち寄ります。情報は事実と推測を分け、時系列で簡潔にそろえると共有しやすくなります。一人では見えなかった背景や、うまくいっている場面が見えてきます。家庭での様子や別の授業での姿が、支援のヒントになることがあります。ケース会議の最後に「次に確認すること」と「いつ振り返るか」まで決めます。
一枚には、困る場面、落ち着く場面、本人の願い、試した支援、次の確認事項を短く並べます。分かっていないことは空欄や未確認とし、推測を事実のように書きません。参加者は支援に必要な範囲に絞り、共有方法や保管先を校内の個人情報の取扱いに合わせます。

工夫3 役割を小さく分ける

「誰が、いつ、何をするか」を具体的に決めます。朝、休み時間、授業中、家庭連絡など場面ごとに役割を決めます。一人の頑張りに頼らず、チームで継続できる支援にします。担当者が不在でも続く形にしておくと、支援が安定します。連絡窓口を明確にし、保護者への説明が職員ごとに食い違わないようにします。
担当は「見守る人」だけでなく、記録をまとめる人、家庭との連絡窓口、専門職に相談する人に分けます。それぞれができる時間と範囲を確認し、不在時の代わりも決めます。教頭は全ての役を担うのではなく、役割の抜けや重なりを見つけて調整します。

全公教調査から



令和8年度 全校種計21,512人・複数回答
数値の出典は下部の参考資料欄を参照。

調査は教頭の職務への受け止めを示すものです。ここで紹介する工夫の効果を実証した調査ではありません。

参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『生徒指導提要』（令和4年12月改訂）第1章「生徒指導の基礎」・第3章「チーム学校による生徒指導体制」。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

困っている子供をチームで支える楽しさ

― 一人で抱えず、みんなで「一歩」をつくる ―

工夫4・5：関わりを続ける工夫と場面別の判断

工夫4 できた場面をケース会議で共有する

問題場面だけでなく、落ち着いていた時間や笑顔があった場面も話します。「なぜできたのか」をみんなで考えることが次の支援につながります。成功の条件を見つけると、次の支援につながります。支援を変えた後は短期間で振り返り、合わなければ柔軟に修正します。できた理由を、場所・人・時間・声掛けなど具体的な条件に分けて考えます。
ケース会議は、できた場面を一つ紹介し、その条件を確かめてから課題に進む形にします。支援を続けるか変えるかは、観察した事実と本人の受け止めから判断します。見直しの期日を先に決めると、成果が出ない方法を漫然と続けたり、急に支援を止めたりすることを防げます。

工夫5 子供の一歩をみんなで喜ぶ

登校できた、話せた、助けを求められたなど、小さな変化を共有します。「昨日より5分長くいられた」など、具体的な変化を言葉にします。「支えてよかった」という実感がチームの力になります。小さな成果を共有すると、担任の孤立感も減り、次の工夫を考える力になります。変化を担任だけでなく、関わった職員全員に返し、チームの成果として喜びます。教頭自身が一番詳しくなる必要はありません。「誰の力を借りるか」を考えることが、チームづくりの第一歩です。会議を開くほどではない小さな変化も、職員室で30秒共有すると、支援の方向がそろいやすくなります。
小さな前進を共有した後は「次の一週間は何を続けるか」を一つそろえます。前進が見えない時期も、担当者の責任だけにせず支援の条件を点検します。教頭が関係者に短く結果を返すと、それぞれの関わりが子供の支えになっていることを確かめやすくなります。

場面で考える（想定例）

ケース会議をしても役割が曖昧なままなら

最後の数分で「明日、誰が何をするか」を一人ずつ確認します。担当者が難しいと感じる点を聞き、代替や協力者を決めます。次回の確認日と連絡窓口もそろえ、記録は要点だけ残します。会議を開いたこと自体を成果にせず、支援が実際に動いたかを教頭が確かめます。

自校で試し、確かめる

実践ページの五つの工夫から、今の学校で取り組めるものを一つ選びます。誰に、どの場面で働き掛けるかを具体化し、一週間程度を目安に、本人や関係者と変化を確かめます。続ける点と変える点を一つずつ決め、記録を増やし過ぎずに次の実践へつなげます。

振り返りの問い

- 本人の考えや希望を確かめたか。
- 教頭と担当者の役割は明確か。
- 続けること・変えることは何か。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・文部科学省『生徒指導提要』（令和4年12月改訂）第1章「生徒指導の基礎」・第3章「チーム学校による生徒指導体制」。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。